

上手俵踊り



昔は神社のお寺等の落成式や祭典などに催し物としてよく相撲が催された。これを勧進相撲と言ひ、寄進されたものを土俵上に積んで見物客に披露し、謝礼の意を表した。当時の寄進は大部分が米であったので、化粧まわしを締めた関取が相撲甚句を唄いながら円陣形をとって踊り、土俵祭が済むと飾ってあった米俵をリレー方式に土俵外に出した。これを踊りにしたもので、上手校区の楠原地区が中心となり踊り継がれている。

踊りは人数に決まりが無く、数人または数十人1組となり、木綿の着物にもんぺをはき、足袋を草履履きで向こう鉢巻きに白木綿タオルで、黄色襷を付けた姿で踊る。また踊り子は長さ50センチあまりの米俵を1俵ずつ用意し、お囃子は赤襷をつけた三味線と太鼓である。

昔は楠原地区で踊られていたが、踊り手の減少などから途絶えていた。平成8年に「祁答院町ふるさと祭り」の特設ステージで楠原小組合による「俵踊り」を披露することになり、同地区の小中学生を含む25人が夏休みから練習を始めた。以降楠原で踊られてきた。平成17年に「上手俵踊り保存会」を発足させ上手小校区員を対象として団員を募り、練習・発表するようになった。平成22年に「薩摩国分寺秋の夕べ」での披露が決まり、団員を原則5・6年生全員と希望者にして人数確保に努めてきた。しかし、児童数の減少もあり、平成26年からは、毎年6月に原則4年生以上は全員とそれ以下は希望者を募り、団員を構成するようになった。

学校の教育課程外の活動になるため、楠原地区出身の市来美年子氏を中心に楠原婦人会が指導者となり、地区コミュニティセンターで、夕方の時間帯で練習するようになっている。

【奉納・披露】

日程：毎年10月8日

場所：豊日雲（とよひるめ）神社境内